百年後の青年に
——『特性のない男』と国家社会主義の時代——

西野　路代

「ドイツ人は、ほかのいろいろでもあるが、特性のない男である」

0. 序
20世紀前半、二つの世界大戦と、その戦間期に作家として活動したローベルト・ムーザール（1880－1942）は、この動乱の時代を背景に長編小説『特性のない男』の執筆に取り組んだ。1913年8月からの一箇年間を第一次世界大戦開戦前夜のオーストリアを舞台に描いた『特性のない男』の第一巻は、1930年に刊行される。1932年12月には第二巻が刊行されるが、その後の小説の執筆は困難を極めた。さらにナチスによる禁書、ユダヤ人の妻、スイスへの亡命と、時代の波に翻弄された作家は、1942年4月に脳卒中による突然の死に見舞われる。これにより『特性のない男』は未完の長編小説となった。『特性のない男』を通してこの時代のヨーロッパを見つめた作家は、第二次世界大戦の終結を知ることとも、その後のドイツの運命を見ることもなかった。

「太平洋上に低気圧があった。それは東方に移動して、ロシア上空に停滞する高気圧に向かっていたが、これを北方に避ける傾向をまだ示してはいなかっ


リヒトムージル自身を思わせる男である一方で、「今日のあらゆる現象にあるあの解体現象に他ならない」と、また「無し、まさしく無」であり「現代が生んだ人種」であると描写されている。ムージルはこの一人の男の姿を通して、ヨーロッパというシステムやドイツ民族が内包していた時代精神そのものを示しているともいえる。さらに言えば、ドイツ民族が歴史の中に抱えついていた「空虚」を描いているのだといってもよいたろう。しかし、この「空虚」はムージルの時代にナチスという全体主義のうねりに満たされていったのは歴史が示しているとおりである。それはあたかも『特性のない男』の執筆があの困難な時代に追いつかれ、並走しなければならないかのようでもあった。

1. 1914年と1930年代

『特性のない男』の時代設定として定めた1913年から第一次世界大戦開戦の年である1914年という時代をムージルはどのようにとらえていたのだろうか。1922年のエッセイ「寄る辺なきヨーロッパ、あるいはわき道に逸れ続ける旅」の中で、ムージルは「第一次世界大戦の諸原因」というべきものについて考察している。3このエッセイでムージルは「思うに、戦争は病気のようにこの社会という肉体に勃発した。魂への通路を絶たれた、ある巨大なエネルギーが、このきな臭い妻を魂に向かって穿孔したのだ」[P1088]と、混迷したヨーロッパ社会という病巣に発症した病として第一次世界大戦を必然的なものととらえている。そして「機能不全におちいった国家や政治がひきおこしたのがあの戦争だった」と当時の政治を批判する。さらに、「特筆すべきは、破局のきわめて特徴的な予兆が、とりもなおさずイデオロギー界の状況の反映にほかならなかったことである。すなわちそれは、国家という機械のハンドルを握っている一群のスペシャリストたちに対する、まったくの放任に現れていたのであって、その結果があたかも寝台車に乗っていて、衝突でやっと起こされたようなありさまたったのだった。この〈成り行きに任せる〉生き方に染まっていたのは、国家の〈作動中の機関〉を前にいて畏まった〈思慮深き市民たち〉だけではなく、馴れ合いながら生きながらえてきたあれこれのイデオロギーもまた染まっていった。イデオロギー同士は互いにほえあうが、噛み付くことはしなかった。
これは個々人を社会に組み込むことと表裏一体の関係にある［P1089］と述べることで、国家やその政治と、そのもとに生きる個人との乖離について問題提示をしてみせる。くわえて「いまだに克服しきれていない戦後の疲労にもかかわらず、今日その周期的崩壊の時期が近づいているのが見てとれる。戦前の精神にも劣るほどに権力者たちに対して、さらに悪質な（あなた任せ）を履行しているのは、ひとりフランス的精神だけではない。わが国においても、新たな体験のおかげでイデオロギーの中身は変わったけれども、社会的反応と政治的活動のやりかたは相変わらずしだれもどろで危なかったいままである［P1090］と述べ、ヨーロッパの混乱や戦争を引き起こしうる状況は繰り返されうるものであることをも予見している。

ムージルは1920年代に書いたこのエッセイのなかで、第一次世界大戦の諸原因をたどり、この社会における国家あるいは政治のあり方について述べながら、これを通して「個人」と「全体」の問題についても考察している。第一次世界大戦という「これまでで最大のもっとも強い集団化」4を経験したドイツでは1920年代、知識人たちが「個人」と「全体」の問題をこれまでにないほど考察したといえるが、ムージルもこれと同じ問題性を共有していた。「断固として平和主義であるときなぜ戦争が勃発しうるのか」という問い、つまり個々人の意思に反することが全体としてならばなぜ起こりうるのかという問いを交えながら、国家や政治から個人の意思が乖離して無力と化した状況を危機的に捉えている。こうした考察は後に『特性のない男』のなかに反映されていくことになる。

『特性のない男』の背景となった1914年という時代設定は、1920年代における小説の構想段階すでに考えられていたものだが、執筆の過程で実際の時間の流れとともに1930年代という時代に突入する。

この1930年代という時代は『特性のない男』という小説にとって考察すべき意味をもっている。ベルナール・ギュマンは同時代の批評家として『特性のない男』を評価した一人であるが、彼は『特性のない男』が「歴史小説」ではなく「現代小説」であることをとりわけ示そうとした。彼は1914年と、1932年から1933年にかけての時代が非常に類似していると考え、「第一次世界大戦前の時代と今日の世界——どこに違いがあるというのか？二つの時代は混じりあ

4 ロタール・ケーン 『文学と（20年代）——ドイツ文学における歴史主義の克服』
藤本淳雄、山口光一訳。ありな書房 1990年 190頁。
「特性のない男」の扱う問題の射程圏が二つの世界大戦を含む時代にあることを示している。ムージルも1914年と1930年代の類似性についてしばしば言及しているが、この二つの時代の類似性は、ギユマンが指摘するように『特性のない男』が1913年から1914年にかけてのオーストリアを舞台にした「歴史小説」ではなく、二つの世界大戦を挟んだ時代のヨーロッパ、あるいはドイツ民族が置かれていた精神的状況を描いた「現代小説」であることを理解する上で前提条件でもあるだろう。

1930年代とはヒトラーという独裁者がドイツを支配し、全体主義が蔓延していた時代である。こうした政治的状況を目の当たりにし、ムージルの言説は二つの歴史的な方向を向き始める。ひとつの視線はこれまで述べてきたように、1914年とそれに続く時代としての1930年代を考察する同時代的なものである。この二つの時代の類似性を前提とすれば、『特性のない男』は第二次世界大戦に至るドイツ民族崩壊に至る足音を捉えているということになるであろう。

そしてもうひとつの視線はドイツ史そのものの垣根を越えていくものである。この視線は、1914年と1930年代の類似性をとりながら、ロマン主義、古典主義についての考察を経て、「なぜドイツはナチスを受け入れたのか」という問いに通じていく。もちろんムージルは第二次世界大戦の結末も、第二次世界大戦の敗戦によるドイツの崩壊も見ていない。だからわれわれが戦後的に考察するような方法でムージル自身がこの問題を考えていたわけではないのは当然だが、しかし、ムージルはこの大規模な流れを時代のさなかで捉えていた。

さらに1930年代に書かれたものにおいてもムージルが問題にしているのは、「個人」と「集団主義」の問題である。1920年代の社会状況のなかでも議論されたこの問題が、さらに深刻さを帯びてこの時代のムージルにも引き継がれているのが見てとれる。社会や政治、国家、そして時代のなかで、個人という存在が集団に対してもいかに機能不全に陥っているのかを指摘し、個人が進むべき道を探ていくのである。

1934年12月にオーストリアのドイツ人作家擁護連盟創立20周年を記念してウィーンで行われた「この時代の詩人」と題された講演からも、ムージルの時代に対する予見を読み取ることができる。この講演でムージルは第一次世界大

---

戦以降のヨーロッパを話題として話をするのが、ここでも1914年という時代が、1933年前後の時代と類似していることを指摘している。そして、この時代の集団主義、全体主義が個人を脅かす危険なものであるということを指摘する一方で、「人間はもともと集団的生き物でもあれば、個人的生き物でもある」とその二面性にも触れ、人間にっての必然であるかのように集団主義を容認する発言もみられる。さらに、集団主義の概念は、当然、それが新しい形態を帯びるよりもずっと前から形作られていたと、レッシングやカントの名を与え、ドイツ史遡るかのように18世紀という時代に言及する。そして、ドイツ古典主義の時代の「集団主義」は「人間性」と「人格」に信頼を置いていたのに対して、今日では、「反個人主義」あるいは「反個別主義」として現れ、必ずしも人間性の情熱的な崇拝者ではないのだと述べ、1930年代のそれと対比させながら、この時代の集団主義に対して警鐘をならす。6

この講演のなかでムージルは、「現代人は、自分で思っているよりもずっと自立的でないことが証明されており、また集団を作って初めて何か確固としたものになれるのです」[P1247]あるいは「個人はもう大して重要ではないという考えが、すでに個人自身に根付いていますし、さらにそのような考え方は、戦争のおかげでいっそう徹底的に教え込まれたのです」[P1246]と「現代人が必然的に性格を喪失せざるを得なくなったという漠然とした認識」[P1247]が生まれるに至った過程についても触れているが、これはこの時代に拡大していく集団主義に比し、希薄になっていく個人の存在についての見解であり、『特性のない男』の構想にもなっている。

こうした考察を加えながら1914年という時代と、1932年から1933年にかけての時代はいずれも「崩壊へ向かう時代である」ことをムージルは自覚していた。実際、ムージルは『特性のない男』の結末に第一次世界大戦の勃発を置くことで一種の破壊を描こうとしたことは知られている。これは第一次世界大戦の結末としてだったのか、あるいはこの先に訪れることになる崩壊だったのか。いずれにせよ『特性のない男』の中で第一次世界大戦前夜を描きながら、それによって出来事の因果の道筋をたどっていたムージルは、1920年代を経て1930年代へと時代が進むにつれ、時代の道筋と合流するかのごとく自らの考察が悪しき形で現実になっていくのを目の当たりにするのである。1920年代において

予見であったムージルの批判は、小説の執筆に時代が追いついたかのように実際の 1930 年代と重なり合っていく。事後的に見れば必然とも思えるが、これがその時代のさなかの考察だということを考えると、ムージルが抱いていた危機感がいっそうの緊張をもって現代のわれわれに迫ってくる。そして、さらにナチスが『特性のない男』に対してじかに影を落とすことになるのである。

2. ムージルとヒトラー
1933 年 1 月 30 日、ドイツではナチスが政権を掌握し、同年 2 月に国会議事堂放火事件が起きる。ムージルはこの事件のあと、ドイツの政治的変革について日記の中で語及している。

ヒトラー。人格となった情動、演説する情動。目的なしに意思を奮発させる。不気味な印象。夜遅くハーケンクロイツの旗をたて、歌を歌うドイツ保安警察官たちをのせた警察自動車がスピードを出してクーアフェルステンダムを走っていった。現代のドイツ人には現実感覚が驚くほど少ない。戦争犠牲者の日に代表団、旗、盛装した学生たちを乗せた多数の自動車。仕事をはじめなければならないのに、勝利の陶酔の雲囲気。[...]一人の男が一民族を征服した！ [TB I 725]

国会議事堂放火事件後のムージルの日記の記述である。ムージルはナチスに対して一貫して批判的な立場にあったところがえる。その独裁的なあり方そのものに対してもそうであるが、自然科学の教育を受けてきたムージルは人種の優劣など科学的に不確かなものであるととらえていたようで、ナチスの唱える人種政策も受け取れたいものと感じていたようだ。ナチスがとる反ユダヤ主義に対しては「ドイツの未来に対する憂患、いや絶望で満たすこと」を確信していたという。7 そこには妻のマルタがユダヤ人であるという事情も加わっていた。また、「市民主義的民主主義の時代は終わり、未来はボリシェヴィキの特徴をおびた集団主義に委ねられるか、ファシズム的特徴を帯びた集団主義の手に陥るかのどちらかだと彼は確信していたようだ」とコリノは伝えている。8

ナチスはすぐに破綻をきたすだろうという向きも同時代の知識人たちにはあったようだが、ムージルはそのように考えてはいなかった。

7 Karl Corino. a.a.O. S.1127. カール・コリノ 前掲書 1493 頁。
8 Karl Corino. a.a.O. S.1124. カール・コリノ 前掲書 1489 頁。
一方で、この時代の「全体主義」のなかで「個人がとるべき道」についての考察と呼応するかのように、ムージルは「国家社会主義を政治的に何かほかのものにおきかえて考えることができるかどうか」という思考実験に関わる気でいた。ムージルは国家社会主義によって支配されたこの時代の全体主義に対して次のような見解を示している。「集団主義のあらゆる形式は偉大な個人、天才的な個性に対する高揚した信仰告白と結びついていて、総統という原理や、それにつきもののピラミッド状の国家組織にもそれがあらわれているのだから、創造的な個人に自由な活動の余地を認めることは可能ならずだ」[P960]。あるいは次のようにも述べている。「ヒトラーの経歴も同じである。ひたす権力を獲得するためには、自分をしなければならないのか。権力をいかに利用するか。それが彼の青春と政治的端緒の問題であった。敗戦後の反動の気分に活気付けられ、アルカディイの自分の〈愚かしさ〉に対する不満が抑鬱状態として繰り返される。何か偉大な人物になるために生まれてきた、そして、いつか偉大な人物になる、という意識と結びついて、すべてはこの形姿に収斂する」[TB I 800]

こうした記述からは、ムージルがヒトラーを総統とする国家社会主義の仕組みのなかに、危険性と表裏一体ではあるが、全体を動かすことのできる自律した個人の可能性のようなものを見て取っていることが窺える。また第一次世界大戦時の経験から9ムージルは人間について「人食いもすれば纯粹理性批判する」あるいは「1914年以来、人間はふつう思われていたよりもずっと、驚くほど変形しやすい素材であることが証明された」とその可塑性について言及している。人間は無定形であり、あらかじめ与えられた形式に順応するというムージル自身のテーゼは「特性のない男」というコンセプトにも反映されているし、「集団を成して初めて強固なものとなる」という国家社会主義の精神を言い当てているともいえるだろう。10「われわれの存在が、運命の操り人形よろしく糸巻きにぶらさがっているのではなくて、ただおびただしい数の微小な、互いに絡み合った錬をまとっているだけであるのならば、われわれは自分でことを決定することができることになる」[P926]というときのムージルは、全体主義に対して個人がまだ持ちうる可能性を模索しているといついてい。この思考の流れを追っていくと、『特性のない男』の中のウルリヒという主人公が、ヒトラー

9ムージルは第一次世界大戦時に従軍体験を持っている。オーストリアの国民軍に入隊し、大尉にまで昇進した。
という現象ある角度で同一性を示すのが見えてくる。
一方で、ムージルが抜ってきたテーマや概念は、ナチスが政権を掌握したことによって著しく政治的なものに取り込まれていくことにもなる。11 ウルリヒとヒトラーの同一性も、その重なり合う角度を適切に示せなければ、危険なコンセプトにもなりうる危うさを孕んでいるが、『特性のない男』第二巻のタイトルにもなっている「千年王国」の構想にも同じことがいえるだろう。ヒトラーがナチス政権下の「第三帝国」を「千年王国」に Narrowed したことは、偶然であったに違いないが、ドイツがこの時代におかれた運命を不気味に扮のめかしもれる。実際には当時の評価家たちの間に当感を引き起こした。12

ムージルが想定する「千年王国」についてはコリノが次のように指摘している。「世界から隔絶された動きのない海であり、クリスタルのように透明な絶え間ない出来事によって揺れている。それゆえ千年王国は、ひとつの目的に向かう道ではなく、ひとつの状態である。かつての千年至福説が夢見たような至福の状態であり、われわれ、その始まりにいる。われわれが千年王国の始まりにいると、ムージルがなぜ主張しているのか、それはいろいろに解釈できるだろう。しかし、そうした解釈はさしあたりはまったく余計であろう。この理念の道筋を納得できる形で明確にすることに作者ムージルは成功していないからだ。ムージルのいう千年王国が純粋に概念的なものであり、地上のあらゆる出来事や現象を精神化抽象化し、あらゆる行為を欠いた意志、理念と精神の海をあてどなく漂うことであるならば、話は別である。そうだとすれば、世界の没落に先立たされている千年王国をまったく懐疑的に見ていることになるだろう。それに千年至福説の意味で千年王国が始まっていると、著者が本気で信じることなどできるはずはない。他のいかなる時代にもまして、そこから遠いこの時代に。」13

ムージルがこの理念の道筋を明確に示していないというのは事実かもしれませんが、千年王国のコンセプトはわずかに『特性のない男』の「夏の日の息吹」の中に垣間見ることができるが、これを理解するのに 1920 年代のエッセイが助けになる。その中でムージルは「愛の体験や内省や恭順などの本来倫理的な体験

13 Karl Corino. a.a.O. S.1115-1116. カール・コリノ前掲書 1473 頁。
には、社会的な場においてさえ、非常に伝達困難なところ、まったく個人的なところ、ほとんど反社会的なところがある」と述べながら、「キリストのなかにも外的な人間と内的な人間があった。そしてキリストが外的な人物に関して為したのは、外的な人間から為したものであり、そのとき的な人間は不動の隔絶の境地にあったのである」というエックハルトの言葉を引用している。「きみはナチの未来信じなければならない。あるいはドイツの没落を、いずれにせよ、ぼくが浸りきっている伝統の解体。この状態でどうしてもなき事をすることができるだろうか？」[TB I 744]。この時代に極限の状況におかれながら『特性のない男』の執筆にかけたムーアルによって、「夏の日の息吹」の章に兄弟愛として現れる千年王国は、彼の倫理がとったせめてもの迂回路だったのではないか。時代に対する完全な解ではないかもしれない。しかしナチスが、あるいはナチスを生んだ時代が、ムーアルにこのような迂回路をとらせたということにこそ目を向けることは許されるはずである。この時代を描きながら、それを描くことが真正であればあるほど、小説の執筆を阻むような状況がそこにはあった。

3．『特性のない男』とドイツ民族

1920年代から、『特性のない男』の根本前提としてあった「個人」と「集団」についての考察は、先にも述べたように、この時代の政治的状況を前にして歴史的な広がりをもつようになる。つまりドイツ民族、あるいはドイツという国が歴史的に抱えてきた空白を意識した発言がみられるようになるのである。この空白を語ることは、出来事の因果をたどることでもあるだろう。ムーアルは19世紀に起きたドイツ統一をめぐる動きと、それを阻止するヨーロッパ諸国の動向、そして第一次世界大戦終結に至るまでの歴史的経緯についても触れていて、そこではベルサイユ条約が「ドイツに未来の犯罪者の役割を割り当てた」[TB I 991]と述べられており、「独裁者たちが現れるよりずっと前に、現代は独裁者崇拝を生み出していた。そこに共通するのは、おそらく支配されることと指導者、一種の救世主への欲求だったろう」[TB I 827]と、第一次世界大戦以降に陥ったドイツの窮状を念頭に、ドイツ国民がナチスになだれこむに至った背景についての見解も示している。

「この意味でナチスにはほとんど戦争の延長があり、ヒトラーは時代本能をもっている」[TB I 825]、あるいは「そして今や、われわれは一人の生き生きとした男をもっている。われわれは今初めてこの男をもつのだ。われわれは
新鮮で強力な身振りをもっている。ドイツ人たちはそれを感知して言っている。世界大戦の無名のドイツ兵士、ヒトラー」[TB I 827]というときのムージルは、ヒトラーという人物ではなく、ヒトラーという現象について語っている。しかし「われわれドイツ人は過ぎ去った世紀の最大のモラリストを生んだ。そして今日、キリスト教の時代が存在して以来、最大のモラルの常転逸脱を生んでいる。われわれはどの視点からみても格外ではなかろうか？あるいは起こっていることは偶然であろうか？われわれはひょっとして調子がぐるぐるっているのだろうか？」[TB I 743]あるいは「自分が体験したかに模倣を引くものを物語ることができること、自分を興味を引くものにすることは、青年の本来的欲求である。今日ではそれがいかに高く、かつ迅速に充実されることだろう。ナチスが万人の心をいやもうなく誘いこんでいくのは、不思議ではない！」[TB I 906]と、ヒトラーという現象に大衆が飲み込まれていくさまを危惧している。そしてこの国家社会主義によってドイツが支配されていく状況を——これは wannにあるかドイツの崩壊を意味することもムージルはこのときすでに予見しているわけだが——ムージルはドイツ人の本質の中に入り物を見るようになったのである。

平均的なドイツ人は夢を見ているときにさえ、模範的にかたかた音を立てながら機能している有能な国家機械のようだ。場合によっては運転手のように耳を傾けているというだけでなく、ドイツの思想家たちも国家のイデオロギーを信奉できるものに深め、それを偶像まがいのものにまで仕立て上げ、国家を人間を完成させる機関、個人を超えたある種の精神とみなしている[…] [P1033]

そしてついには自らの小説のタイトルの意味をすらドイツ人の本質というべきものに委ねていくのである。

ドイツ人は、ほかのいろいろでもあるが、特性のない男である。唯一の目標は？本分を尽くすこと。ドイツ人にはひとつの目標があたえられなければならないのであろうか？平均的ドイツ人とはそれ以外になにももっていない。

[TB I 995]

このようにしてムージルは一人の独裁者の手による全体主義の時代を描いた理由をドイツ人の特性に還元していく。他的ヨーロッパ諸国に比して近代化が遅れたドイツは、神聖ローマ帝国というシステムに包括されつつ、領邦国家と
としての道のりを歩み、統一国家というものを持たずに19世紀を迎える。そうした歴史が、ドイツロマン主義のような思潮を生んだ。「ロマン主義も感情に基礎づけられて思考を求める限りにおいて正しい。民族的見解に従えば、ロマン主義もまた国家の神話を求める」 [TB I 958]とムージルも述べているが、ドイツロマン主義は統一国家成立というシナリオを前に18世紀から19世紀にかけて、ドイツにおけるナショナリズムの高揚とも結びついた。国家を持つためがゆえに、統一的なものをよりいっそう志向する、これは歴史から見えるドイツ的な精神のひとつの傾向といえるだろう。さらに「われわれの時代は十六世紀の宗教運動との類似をしめしている」 [TB967]と記したムージルは、宗教改革期の精神性をも念頭においていることが窺える。ドイツにおいては全体と個人の問題がより精神的な意味合いを帯びている。『特性のない男』のウルリヒが、充溢した主体として機能するということは、この時代にヒトラーという現象を生んだヨーロッパあるいはドイツの本質を浮かび上がらせることでもあった。14

『特性のない男』第二巻の刊行直後、同時代のグルマニストであるヴォルフディートリヒ・ラッシュに対してムージルはどのように述べている。「この小説が成功するのは、小説そのものが描いている時代の様相と矛盾します。成功に恵まれないことで、作者の説得力は疑問視されるかもしれませんが、同時に長編小説の構想は確証されることになるでしょう。わたしはどうしたら望むべきでしょうか？もちろんですたちは、あなたが思っているような影響があることを望みます。でもそうはならないと思います。のちになれば、ひょっとして。あとになればきっと」。15 この含みの中にわれわれは何を読み取るべきであろうか。

4．百年後の青年に宛てた手紙
カール・コリノはムージルの伝記のなかで『特性のない男』の本質にせまる問いを投げかけている。

14 こうしたドイツ史料念頭においてナチスドイツについての考察は、たとえばムージルと同時代人であるトーマス・マンがドイツの無条件降伏後もまもなくの1945年5月29日に、亡命先のアメリカで行った講演『ドイツとドイツ人』の中に見られるものである。またヘルムート・ブレッサーの『ドイツロマン主義とナチズム』のような考察もある。視点として目新しいものではないかもしれないが、戦後さらに十年の生命を賜ったマンとは異なり、第二次世界大戦を事後的に考察する機会を持ちえなかったムージルにとっては時代のさなかの考察であり、またそれが文学における試みであったこと、さらには問題の現代性に焦点を当てることが必要であろう。
15 Karl Corino. a.a.O. S.1088. カール・コリノ 前掲書 1429 頁。
ムージルがその主人公の中に、厳然と存在してはいるが、比較的珍しい特異な性格像を書きとめたのか、それとも百万単位で拡大している、確実に政治的にもきわめて大きな意味を持つことになるはずの、社会的な性格を描いたのかという問いは、おそらくムージルの長編小説に対する決定的な問いかけのひとつであるだろう。⑯

これについてはいくつかの答えが考えられる。「特性のない男」というモチーフには、西欧の思想が伝統的に扱ってきた主体の問題とでもいうべきものが源流としてあるといえる。ムージルが第一次世界大戦前に書いたいくつかの小説のなかで示された哲学的な意味においての、あるいは神秘主義な意味においての「非個人的なもの」への志向はムージルを特徴づけるもののひとつといっていい。「特性のない男」という概念は、もとはムージルの存在に対する根元的な思考から作り出されたものでもあった。しかし、時代は1914年の第一次世界大戦を経て、1930年以降の時代に流れ込み、「特性のない男」の背景としておかれたとき、「特性のない男」という中空に映りこまるをえなかった。先の指摘に続いてコリノは次のようにも述べている。

この点になるとムージルは明らかに優柔断として、時がたつにつれて、彼の不気味な公式に一歩一歩近づくのである。すなわち、「特性のない男」とは「システムなき世界における、システムなき男ではなかったのか」というわけである。すると、世界が突然にシステムを再び獲得するとき、たとえそれがあさまざるファシズムによる狂気のシステムであったとしても、そういう変化が起こるだろうか。そのとき彼は突き立て堅固なかたちと特性を得るのか、あるいはムージルの思索にあるように、そのときこそ彼はいよいよ「特性のない男」ととなって、あやまって演繹的に生み出された世界像に対して、彼自身の帰納的な思考のユートピアを位置づけるのであろうか。⑰

まさにここでは「特性のない男」とヒトラーという現象が重ねあわされてい るようにみえる。1942年の作家の突然の死がこの問いに対する返答を不可能にしたが、ドイツを覆う全体主義と、それを支配するヒトラーという一人的男を

⑯ Karl Corino. a.a.O.S.838. カール・コリノ『ムージル伝記2』早坂七緒他訳 法政大学出版局2012年1092頁。
⑰ Karl Corino. a.a.O.S.838. カール・コリノ前掲書1092頁。
前にして「創造的な個人に自由な活動の余地を認めることは可能なはずだ」と考え、国家社会主義という政治的な現象を自らの作品の思考実験に置き換えようとした事実、そして「ドイツ人は特性のない男である」とムーデルが言った意味がここにある。

父なる神が政治の変化と独裁者の文化的根本感情を明らかにした。そこではさしあたり家族の原則を書きとめた。第三から第四世代のうちにヒトラー時代が来るかもしれない。しかし、ここに書いてある大見出ちは何か別なことを言おうとしている。ぼくはしばしば八十年（から百年後）の青年に宛てた手紙を書くことを考えた。そのかわりにこの手紙は現代のアメリカ人に宛てることもできるだろう。[TB I 805]

ここでムーデルは第二次世界大戦中のヨーロッパの危機がまだ波及していないかった当時のアメリカ、あるいは、第二次世界大戦の記憶を遠い過去とする未来の青年に宛てた手紙を書くことを考えている。未来の青年とは今に生きるわれわれのことだ。ムーデルがヒトラーの再現を予見するのは、ナチスを生み出したものが、ヨーロッパ、あるいはドイツが根本的に内包していたシステムの中にあると見ているからだ。そのシステムとそこに生きる個人を『特性のない男』は示そうとした。そしてこのシステムからいかに個人が自律的に機能しうるのかを極限まで問うたのが『特性のない男』の思考実験だった。

ムーデルは「現在のために過去を、そして歴史的未来への現在の意志に照応するように描くこと[TB I 755]という哲学史家カール・レーヴィットの言葉を日記のなかに引いているのが、歴史の流れについて次のように述べている。

歴史の進む道筋は、いったん衝突すればあとは決定可能な軌道に沿って進むピリヤードの玉のたどる道筋ではなく、雪のたどる道筋に似ている。雪の道筋は確かに自然法則にしたがって繰り広げられるが、それと同程度におさえられて諸事象との遭遇としか喚びようもないものからの影響も受けている。というもの、たとえところで風が西から東へ吹くのは、西に最高気圧、東に最低気圧があるからであるが、両者の間に存在する場は限定されているとか、近くにあるどんな雪の塊も風を変えない、あるいは他の競合する影響が表面化することはないといった天気を形成するすべての状況は、たとえ計算可能なものではあっても、まさに诸事象と遭遇するのであって、法則と遭遇するの
ではないからだ。[P1374-1375]

『特性のない男』の冒頭部分を連想させる描写である。1913年の8月のある晴れた日の天気図は1945年の終局をへて、現在のわれわれを覆う大気とつながっている。「三世代後、四世代後にはナチスが再びやってくる」とムーグルが予見した時代は、この天気図のようにたえず諸事情に影響されながら、今まさに道筋を定めているところなのだろうか。ムーグルが描こうとしたあの時代のヨーロッパが孕んでいた問題を今日の世界も内包しているのならば、出来事は繰り返されるのだろうか。天気図の描写は、歴史は明確な因果を示さず、われわれはその情勢を見つめるほかのないということを示しているようでもある。

誰もがその時代の象徴を体験する。ただその象徴はしばしば後になって理解できるものとなる。ぼくに関しては、読書サークルとそのなかでのぼくの態度を理解するには第二次世界大戦が必要だった！」[TB I 962]

仮にムーグルが第二次世界大戦を事後に考察するだけの寿命を得ていたとしたら、『特性のない男』はどのような小説になっていたのだろう。ムーグルが手紙を書くことを考えた未来に生きるわれわれはもういちど、この時代に、この小説を読み解くべきなかもしれない。さらに小説に踏み入っての考察は、また稿を改める必要があるだろう。